

唯一の教育旅行専門誌

月刊教育旅行

2023.10

連載 教育旅行研究

京都府 京都橘中学校・高等学校

[方面：京都府]

グラビア
特集

京都で「探究的に学ぶ」 教育旅行プログラム

～ Q都スタディトリップ～





京都で「探究的に学ぶ」教育旅行プログラム

～Q都スタディトリップ～

京都は、中学校の修学旅行の旅行先として常に1位を占め、高校においても常に上位に位置している。これはコロナ禍で実施された修学旅行でも揺らぐことはなかった。

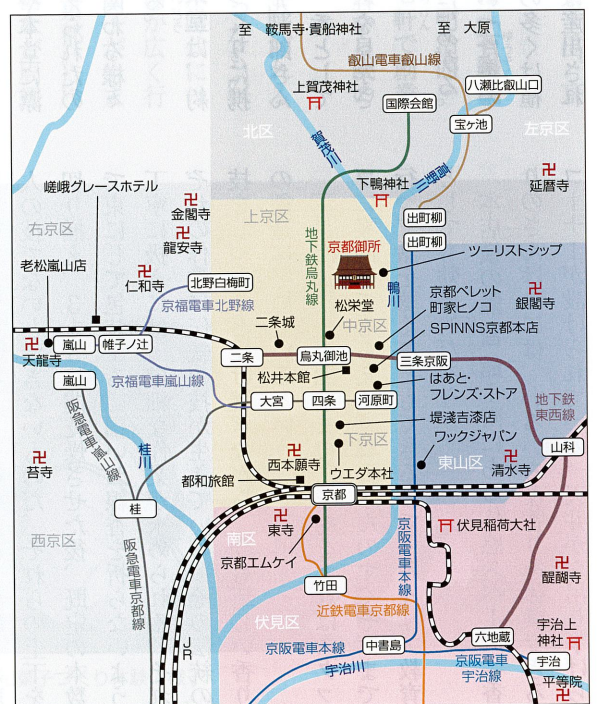
京都への修学旅行といえば、清水寺や鹿苑寺金閣、伏見稲荷大社などの神社仏閣や京都に遺された多くの文化財を巡る歴史学習、あるいは座禅や写経などの伝統文化体験が定番になっている。しかし、京都には、それら以外にも多くの学びの資源がある。とくに京都が、平安遷都から現在に至るまで、度々の戦乱や自然災害、疫病の流行、飢饉などを経験してきたにもかかわらず、1200年もの間都市として続いてきたことに学ぶ点が多い。

それは、伝統を守りながらも時代に応じて革新を繰り返し、様々に工夫することで「住み続けられるまちづくりを」(SDGsの目標11)を進めてきた、京都に住む人々の営みについて学ぶということだ。

京都市と京都観光推進協議会は、SDGsに視点を定めた「探究的な学習」のためのコンテンツを「Q都スタディトリップ」として新たにプログラム化し提供している。先日、それに参画している施設や企業・旅館などのうちいくつかを視察させていただいた。

「Q都スタディトリップ」とは

「なんでだろう?」。京都のまちを歩いているとこうした疑問に出会うことが多い。これらの疑問を「Q」としてリストにまとめたものが、「Q都

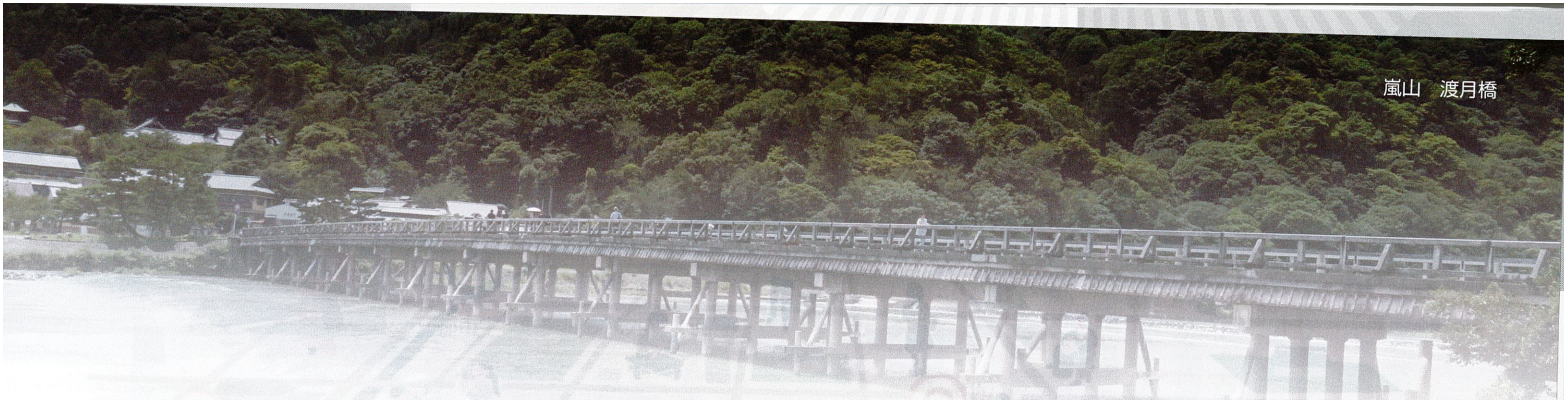


スタディトリップ」のWEBサイトにあげられている。そこには、リストの中で自分が興味・関心を持ったQに紐づけられた施設や企業・旅館など(Qスポット)が紹介されている。このWEBサイトはオンラインの学習にも使えるが、やはり実際に京都でQスポットを訪ねたい。そこで見て、聞いて、体験して気づいたことや発見したことを入り口に、今度は自分たちができることを考える。このような京都での「探究的な学習」の旅が「Q都スタディトリップ」なのだ。

京都の伝統の技に学ぶ

○堤浅吉漆店〜縄文時代から続く漆精製の技〜
小文字で書かれたpanelは、漆・漆器という意味を持つ。漆は、日本では塗料や接着剤として縄文時代から広く使われてきた。

地下鉄四条駅近く、住宅街の一角にある明治四二(1909)年創業の堤浅吉漆店(あさきち)は、樹液か



漆塗り体験の様子

ら生漆を精製し、それをさらに加工して塗漆として販売する漆メーカーだ。専務の堤卓也さんから次のようなお話を伺いながら、施設を見学させていただいた。

樹齢10〜15年のウルシの木一本から採れる漆の樹液は、およそ200gと少ない。採取したらその木を伐採して、切り株から出た芽をまた育てる。漆は、樹液の採り方や育った時期、場所で性質が変わる。産地から集めた樹液を濾して生漆をつくり、それを攪拌機に入れて練りながら水分調整を行う。色漆はこれに顔料を加えて練り合わせる。練り方しだいで漆のツヤが変わり、また季節によっても違ってくるので、漆を塗る職人個々の要望に応じてつくらなければならない。できた塗漆は、そのデータを保存したあと樽に入れて出荷まで保存する。

気を遣う細かな作業が多く、熟練の技が必要な

ことがよくわかる。「工藝とは、自然から材をいただいてモノをつくること。そのことを通して自然に対する敬意が生まれる」という堤さんの言葉が印象に残った。

漆は、食器をはじめとする様々な器財や寺社建築、仏像の製作などに欠かせない塗料・接着剤だが、現在国内で利用されている漆の95%は中国産だという。漆精製の技術は、寺社をはじめ多くの文化財が残る京都だからこそ、現在まで伝えられてきたのだろう。

漆は丈夫で硬く、塗った部分が傷つけば塗り直して補修できる。そのため、最近では循環可能な素材として注目されているという。漆の特性を活かした漆塗りのサーフボードやスケートボード、自転車等の需要も出てきているそうだ。伝統の技が、時流に対応しながら次の世代に受け継がれていく。まさにSDGsの好事例だといえるだろう。

○松栄堂「香」づくりの技と文化

寺院を訪れてまず感じるのは、境内や本堂に漂う心地よい香りだ。日本に「香」が伝えられたのは、仏教が日本に伝来した頃。仏教に関わる様々な儀礼に伴ってのことと考えられている。

京都御所の南に本店を構える松栄堂は、約300年前の創業時からこの地で香づくりに関わってきた老舗だ。企画事業部長の辻光一郎さんから香についてのお話を伺うとともに、香としては最もポピュラーなお線香づくりの工程を見学させていただいた。

香の香りに包まれながら本店の2階にあがる。ここには、貴重な香木や乳香・桂皮といった香の原料などが展示されている。香の原料の多くは植物性香料だが、そのほとんどは日本では産出され

ず、海外からもたらされる貴重なものだそう

だ。「香房」で、お線香の製造現場を間近に見学した。

きれいに磨かれた混練機がある。この機械で原料を

混ぜて練る。香りが混じらないよう使用後は、毎回きれいにしているとのこと。混練機の次は、押し出し機を使用する。油粘土状の原料が、機械から蕎麦のように長く連なって出てくる。これを一定の長さに切っていく。この作業は、熟練した職人の技でないとできないものだ。それらの上下を切り揃え、3〜5日間乾燥させた後、既定の本数で束にして包装する。細いお線香を折らないよう丁寧に扱うには、繊細な作業が求められる。それぞれの作業に伝統の技が生きている。その伝統の技をしっかりと受け継ぎながら、今も新しい香りの創造に努めているという。

「香房」は、一週間前までに予約をすればスタッフに案内してもらえる。職人さんのすぐそばまで行って話を聴くこともできるので、キャリア教育としても効果的だろう。

本店横の薫習館1階にある体感スペース「香りのさんぽ」には、いろいろな香りを体験できるコーナーが設けられている。天井から吊り下げら



お線香のもとを切り揃える職人技

○老松 嵐山店〜伝統文化としての和菓子〜
 京都を取材したのは6月。食事のあとに「水無月」という和菓子が出されたことがあった。「水無月」は水の角を表した三角形のういうろに小豆をのせて固めたもの。京都の人々は、6月の最後の日に高価だった水の代わりに「水無月」を食べ、これからやってくる暑い夏を乗り切ろうとしたのだという。

京都にある和菓子店の数は、人口比全国一。そ

れた白い箱「かおりBOX」に入ると、これまで経験したことのない香りに出会える。「香りの柱」では、香の原材料そのものの香りが体験できるが、麝香など嗅ぐには少し勇気が必要なものもある。松栄堂では、伝統の技とともに自然の恵みを受けて育まれてきた「香」の文化に触れることができる。この体験を通して、自然への敬意が生まれてくる背景に目を向けてみたい。



薫習館の「かおりBOX」

う聞くとなるほど、と納得がいく。和菓子は、京都を代表する伝統文化なのだ。

今回訪問させていただいた和菓子店は「有職菓子御調進所 老松」の嵐山店。老松は、明治四一(1908)年に北野天満宮近くのの上七軒で創業した老舗だ。嵐山店の店長南條智紀さんから次のようなお話を伺った。

京都の和菓子は、とくに「京菓子」と呼ばれるが、この呼び方は江戸時代からはじまったもの。和菓子は茶の湯との関係が深いが、江戸時代には公家・武家・豪商などそれぞれで茶の湯が広く行われ、その場に供される菓子として京菓子が生まれた。日本の政治・文化の中心だった京都には、丹波の黒豆や吉野の葛、四国の和三盆糖など周辺の地域から良質の材料が集まり、伏流水にも恵まれていたことから、和菓子の文化がどこよりも発展した。また、盆地であるため四季がはっきりしている京都では、季節や年中行事に合わせた菓子がつくられるようになり、寺社参詣の人々を対象とした門前菓子も現れて町民にも和菓子の文化が広がっていった。

和菓子の文化が、京都の歴史的な位置や地形、人々の暮らしなどと深く関わって発展してきたことがよくわかる。見せていただいた「菓子見本帳」には、四季折々につくられる様々な形や色、そして銘が付けられた和菓子の絵が美しく描かれていた。老松では、看板商品「夏柑糖」の原料となる夏みかんの規格外品の果汁や皮を他の商品に活用し、フードロスの削減にも積極的に取り組んでいる。

レクチャーのあとは、実際に自分で和菓子を作り、香煎茶(北野天満宮梅苑御用の梅昆布茶)とともにいただく。京都の和菓子づくりの技が、時



和菓子づくり体験の様子

代の流れに応じつつも、世代を超えてなぜ今日まで伝えられてきたのか、「五感」を使って探究的に学ぶことができる体験プログラムだ。

京都のSDGsへの取り組みに学ぶ

○ウエダ本社〜いきいきと働ける職場とは〜

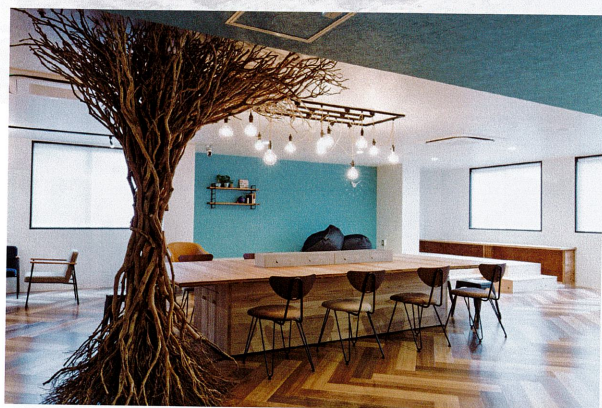
社会の様々な分野で「働き方改革」が求められるようになってきている。この改革とは、長時間労働の是正や公正な待遇の確保、柔軟な働き方がしやすい環境整備などを通して、働く人々が「多様な働き方を選択できる社会」を実現するためのものだ。そうはいっても、企業が取り組んでいる「改革」の実際を生徒たちが目にし、そこから学ぶことは難しい。

地下鉄五条駅近くに社屋を構える(株)ウエダ本社は、働く人にスポットを当てた「働く環境の総合商社」として、いきいきと働ける職場づくりやICTシステムのデザインなどの事業を展開し

ている。そのオフィスを視察させていただいた。最初に5階。ここは主に打合せに使うフロアで、社員の要望を受けて作られたという。手前には電子ボードがあり、各自のデスクにあるパソコンから情報をやり取りできるようにしている。6階は、社員が日常的に業務するオフィスで、それぞれがフリースタイルで仕事ができる。7階には、いろいろな形のソファが置いてあり、ゴロツと横になって休んでリフレッシュすることができ、休憩スペース。その上は屋上で無農薬栽培の菜園になっている。ここで収穫された野菜は、みんなで分けていただくという。

下った3階には、保育園のように子どもが遊べるコーナーがある。子連れで出勤しても、子どもを遊ばせながら同じフロアにあるデスクで仕事ができる。女性に限らず、子育て中の社員が働きやすい職場のモデルだ。

いきいきと働くことができる職場環境とは、仕



(株) ウエダ本社のオフィス

事の内容や労働時間、賃金といった勤務条件、職場の人間関係など様々あるが、気持ちよく働けるオフィスもまた大切な要素だと思う。こういうところで働いたらよい仕事ができそうだと、思えるようなオフィスがウエダ本社にあった。SDGsの目標に「働きがいも経済成長も」があり、「働きがいのある人間らしい仕事を実現」することがターゲットの一つとされている。働くことは人間としての社会的責任を果たすことでもあるが、それを持続可能にするためには、人間らしく仕事ができる環境づくりが何よりも大切だ。では、その環境をどうつくっていったらよいのか、ウエダ本社の取り組みに学びたい。

○ ツーリストシップ、旅行者の心構え

コロナ禍前の京都市内は、日本人と外国人の観光客であふれかえり、混雑で路線バスにも乗れないなど住民の日常生活が脅かされるような状況が生まれていた。オーバーツーリズムとか観光公害というのがそれだ。その中で、旅行者のマナー違反が問題視されることも多かった。そうした状況を背景に、旅行先と共存共栄していくうえでの旅行者の在り方を「ツーリストシップ」と名付け、それを京都から日本へ、そして世界に広げる活動を展開しているのが(一社) ツーリストシップだ。代表の田中千恵子さんからお話を伺った。

「行けば行くほど旅先を消費する旅から、行けば行くほど旅先を豊かにする旅へシフト」する、ツーリストシップとはそのための旅行者の心構えや振る舞いのこと。それには、「調べる」・「挨拶をする」・「聞く」・「読む」・「守る」・「生かす」という6つの基本的なアクションがあり、旅行者の側からこうした行動を起こすことによって旅行先

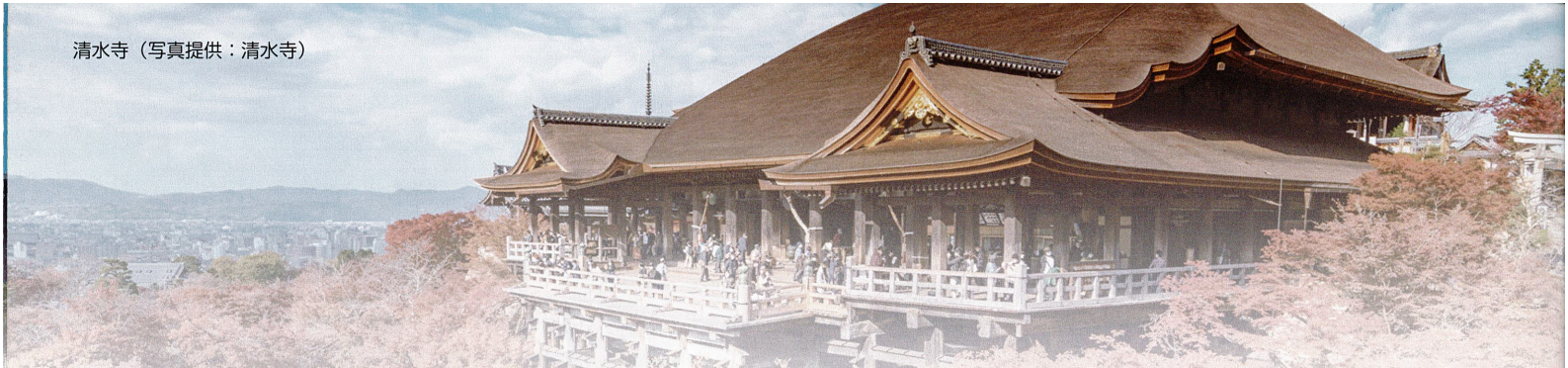
との間に良好な関係が生まれ、好ましい旅行文化が築かれる。現在の活動は、旅行先の歴史や文化、地域課題をクイズ形式にして、旅行者に答えてもらいながらツーリストシップ



商店街での「旅先クイズ」の様子

を学んでもらう「旅先クイズ」、京都なら「京くみひも」などその地域の素材を活用したグッズを作って販売し、同封のパンフレットでツーリストシップについて紹介する「グッズ製作」など。修学旅行の事前学習や現地学習の際の講演やワークショップも実施しているとのこと。

修学旅行生は、事前学習で6つの基本的なアクションについては学んでいることと思う。ただし、実際にそれを修学旅行先で行動に移せるか、また他の旅行の際にもそのような行動ができるか、といえれば後者についてはとくに心許ない。彼らが、旅先と共存共栄することができる旅行者となること、将来にわたり旅行を持続可能な文化活動とするうえで極めて重要だと考える。このプログラムは、ツーリストシップを自分ごととして考えるための糸口となるもので、とくに事前の学習内容として大きな効果が期待できるだろう。



町家での茶道体験

〇ワックジャパン「伝統の生活文化体験」

京都国立博物館の西向かいにある2軒の京町家「京都和心館」と「ふくべ」が（有）ワックジャパンの東山地区の社屋だ。ワックジャパンは、もともと訪日外国人に日本文化を体験してもらうことを主な事業としてスタートした会社だが、日本の若者こそ日本文化を発信してほしいという思いが強く、2000年に教育旅行市場に参入。京都に来た修学旅行生が留学生と一緒に名所を巡るといった国際交流プログラムなども手掛けている。また、生徒たちに日本の伝統文化に息づくSDGsを伝えることをねらいとした新たなプログラムも提供している。それらのうち「風呂敷でものを含む」体験をさせていただいた。

最初に、クイズ形式で風呂敷の歴史やサイズ、文様など基本的な知識を確認。風呂敷が使われなくなったのは1970年代。スーパーマーケットが出現しレジ袋が普及してからで、レジ袋の原料とされる石油は1年間で東京ドームの容積の4.5倍にもなるという。

包むには「結び」が大切というお話を聞いた後、スイカやお皿、ペットボトル、長い箱などいろいろな形をしたものを包む体験。大きさを変え

るだけでどんな形のものも包むことができるという風呂敷の便利さに改めて気づかされ、出かけるときには風呂敷一枚は持って行こうという気持ちになった。ほかにも数多くの体験プログラムが用意されていて、講師はそれぞれの伝統文化に精通したベテラン。英語で教えることもできるとのこと。

外国に行くとき必ず日本の伝統文化について質問されるが、それにきちんと答えることができない生徒が多くいることはよく知られている。多様な伝統文化が伝えられてきている京都で、その一端でも体験できるとすれば、それは生徒にとって一生の財産となるに違いない。ぜひ、京都ならではの体験活動にチャレンジしてみたい。

〇SPINNS京都本店「古着の価値を発信」

古着事業を全国的に展開している（株）ヒューマンフォーラムは、3つのブランドを持っているが、SPINNS（スピンス）はそれらの中心のブランドだ。新京極通にあるSPINNS京都本店は、10代から20代前半の若者をターゲットとする古着と新品のアパレルショップ。デニムパンツ、トップス、Tシャツ、スウェットをはじめ、古着やアクセサリ、雑貨、コスメまで幅広い品揃えとリーズナブルな価格設定、さらびやかで遊び心のある売り場が特徴だ。

30年前、ワゴン車での古着販売からスタートしたSPINNSは、古着を売るだけの店ではなく、ファッションは自分の内面の主張であるとして「主張がスタイルをつくる」、「変わるってムテキ」をコンセプトに、自分らしい表現とファッションを通して生き方さえも変えていけることを大切にしている。古着に価値を見出し、モノを大切に

することや、古着を長く楽しむ「古着文化」を発信し、最近では市内に古着の回収ボックスを設置して古着が循環する仕組みを積極的につくっている。



古着が並ぶSPINNS京都本店

SPINNS京都本店では、「古着を探せ！」というテーマで、90年代の服を探す、ヴィンテージ古着に詳しくなるといったグループ参加型のプログラムを実施している。また、ヒューマンフォーラム本社では、SDGsの「つくる責任、つかう責任」をテーマとして、今のファッション業界を取り巻く環境についての講義、廃棄される衣料品を用いた「リメイクワークショップ」、廃棄物に新たな付加価値を持たせて新しい製品にアップグレードする「アップサイクルegg」などのプログラムを実施していて、多人数にも対応している。

〇はあと・フレンズ・ストア「障がい者福祉への理解促進」

京都市が推進する「はあと・フレンズ・プロジェクト」は、市内の就労支援施設でのものづくりや生産品の質の向上、販路拡大に取り組む事業。障がいのある人々のものづくりや多様な生き方を支援し、市民への障がい者福祉に対する理解促進を図っている。このプロジェクトの取り組みを推進